

## 復興からはじまった「つながりデザイン」

The Community Design That Began by Recovery

新井信幸

Nobuyuki Arai

仙台あすと長町における仮設住宅から災害公営住宅への「復興コミュニティデザイン」の取り組みは、過去に2回<sup>注1・2</sup>、本誌で取り上げられているが、それから進展して、今は仮設住宅から災害公営住宅へステージが移り、取り組みも復興からその先へと転換点を迎え、新たな動きも生まれている。そこで、これまでの経緯も踏まえて、あすと長町の現在を紹介したい。

### 仮設住宅からの復興コミュニティデザイン

仙台市内最大233戸の「あすと長町仮設住宅」（以下、あすと仮設）は、見知らぬ者同士の寄せ集めとなり、当初から高齢者等の孤立が懸念されていた。それでも、立地のよさが手伝って、地元NPOや大学をはじめ多くの支援に恵まれた。また、居住者も積極的に自治活動を展開し、

入居開始から4カ月後の2011年8月に自治会の準備会（運営委員会）を立ち上げた。その後は、クラブ活動のような小さなグループが幾つも生まれ、それらがつながり合われることでコミュニティがかたちづけられ、楽しみながら支え合う関係が育まれていった。そして、翌年3月11日に正式な自治会が発足した。

その後は、次のステップに向けて、仮設住宅で育まれたコミュニティを継承し、緩やかなつながりのなかで、高齢者が安心して暮らせる災害公営住宅の計画提案をしていくことになった。そして、この取り組みに賛同する居住者等（約80世帯）によって、「あすと長町コミュニティ構築を考える会」（以下、考える会。代表＝飯塚正広氏）が発足した（2012年6月）。筆者は、この取り組みを全面的にサポートし、約1年間、ワークショップや見学会等を12回開催し、毎回30～60名の居住者と共に議論しながら計画案を練っていった。し

東北工業大学工学部建築学科准教授／1972年生まれ。2006年千葉大学博士課程修了後、ハウジングアンドコミュニティ財団研究員を経て現職。学術博士（Ph.D.）。建築計画、住まいまちづくり。



図2 第一災害公営住宅世話会の様子（2015.12.9）

かし、この計画提案は実現しなかった。

その一方で、あすと仮設の近傍に三つの災害公営住宅（327戸）が建設されることになり、それらに計約80世帯がつながりを維持するかたちで入居できるようになった。そして、「卒居式」を開催し、しばらく仮設住宅に残る人たちとのつながりも大事にしていくことを宣言した（2015年4月）。

### 災害公営住宅に移って

仮設住宅の入居から丸4年が経って、ようやく三つの災害公営住宅への引越しが始まった。入居者の顔ぶれは、あすと仮設から約1/4、その他から約3/4。その他からのほとんどは民間賃貸住宅を借り上げた「みなし仮設」からの単独の入居であった。そうしたことから、新たなコミュニティと自治組織づくりが始まった。それを主導したのは、あすと仮設からの入居者であった。「考える会」と筆者は、そのうちの住戸数が最大（163戸）でリーダー不在の第一住宅を重点的にサポートしていった。そこでは仮設住宅での経験



図1 第一災害公営住宅の外観



図3 ダンボールのタナづくりワークショップの様子(2015.7.17)

をもとに、拙速的に自治組織を立ち上げるのではなく、居住者同士の信頼構築を重視しながら、住宅管理とコミュニティ形成への意識向上を、会合の運営支援を行いながら図っていった。それとともに情報発信にも力を注いだ。会合での議論の内容が他の入居者に伝わらないと、「夜な夜な集まって何やってるんだ?」と不信感が広がりがねないからだ。そうして、入居から約1年が経って、2016年3、4月に三つの災害公営住宅で自治組織が立ち上がった。それぞれ入会率は80%以上となった。

### つながりデザインセンター・あすと長町(通称: つなセン)

「考える会」は、仮設住宅から災害公営住宅へコミュニティをおおむね維持させることができたことで名目上の役目を終えた。その一方で、高層マンションの閉鎖的な居住環境では、偶発的なコミュニケーションは消え、単身高齢者からは



図4 つながりデザインセンター・あすと長町のロゴ

「仮設住宅の方が楽しくてよかった」という声も漏れていた。仮設住宅では毎日のようにイベントや支援活動が展開され、集会所が「みんなの居場所」となっていた。しかし、災害公営住宅では、そうした状況は見られていない。そのため、飯塚氏と筆者が発起人となり、「考える会」を発展的に解消し、新たな枠組みで活動を継続して展開していくことになった。その際、仮設住宅で支援活動に取り組んできたNPOや大学研究室など、十数団体に呼び掛けて連携しながら取り組むこととした。

また、「考える会」での経験知が、次第に他の地域から求められるようになってきた。これから入居が始まる災害公営住宅や、入居済で自治運営やコミュニティ形成がうまくいっていないところからである。そうしたことから、これまでの取組みの要点をレイアウトしたパンフレットを作成し、熊本の仮設住宅(益城町・テクノ仮設等)などにも配布してきた。

そして、「つながりデザインセンター・あすと長町(通称: つなセン)」<sup>注3</sup>を設立(10月)し、これまでの活動を継続・発展させていくことになった。

### つながりはツリーではない

最後に、これまでの取組みを通して、ひとつ気づいたことがあったのでつけ加えさせていただく。仮設住宅が撤去され

る前に、支援団体にヒアリング調査を実施した。それらは交流を目的とする活動がほとんどであったが、参加している仮設居住者の顔ぶれを見ると、それぞれかなり異なっていることに気づいた。「この人の活動には参加するけど、あの人のところにはいかない」みたいなことが、一人ひとりの内側にはあるのではないかと推察する。要するに「支援にも相性がある」ということである。「毎月サロンをやっても固定客しか来ない」という話を、福祉系まちづくりの現場でよく伺うが、これも同じことで、世の中そんなもんなのだらうと思う。だとすると、あすと仮設のように、活動主体が多様であれば、参加する側(支援の受け手)にとって「選択」ができるわけで、孤立しがちな世帯も、どこかにつながりやすくなる。そう考えると、町内会といった唯一無二の存在が、地域自治や地域ケアを担うというあり方は、少し考え直す必要があるように思える。

「都市はツリーではない」とC・アレグサンダー<sup>注4</sup>は言っていたが、まさに人と人とのつながりもツリー構造(トーナメント構造)ではなく、セミラティス(あみだのような構造)というか、もっと途切れ途切れの状態でしているはずである。これをどうデザインしていくのか。それは被災地問わず、日本のいたるところで求められていると言えよう。そして、それを担えるのは、ツリー構造からなる既存の社会システムではなく、NPOのような個の協働体なのだ、少し大きく構えつつ、「つなセン」を漸進的に育てていきたいと思っている。

注1 新井信幸「復興のその先に向けたコミュニティ・デザイン——あすと長町仮設住宅(仙台市)での取組み」(『建築雑誌』Vol.128 No.1641、2013.2、pp.4-5)

注2 新井信幸「続・復興のその先に向けたコミュニティ・デザイン——あすと長町仮設住宅(仙台市)での取組み」(『建築雑誌』Vol.129 No.1661、2014.8、pp.28-29)

注3 「つながりデザインセンター・あすと長町」については、ホームページを参照されたい。www.tsuna-cen.com

注4 C・アレグサンダー『形の合成に関するノート/都市はツリーではない』(稲葉武司ほか訳、鹿島出版会、2013)